

■肢体不自由のある子どもへの実践事例

子ども一人ひとりの実態に合った読書形態を検討し、提供していく

東京都立八王子東特別支援学校
谷本 式慶

はじめに

本校は、小学部1年から高等部3年までの児童・生徒148名が在籍する肢体不自由特別支援学校です。2012年度より、わいわい文庫利用研究校となり、マルチメディアDAISY図書は、貸与されたタブレット端末（iPad1台、iPod10台）および校内のタブレット端末（iPad 9台）に導入して活用しています。

iPodへの作品の収納方法

これまでは、iPod 9台それぞれにすべての作品を入れていましたが、作品数が増加して収納しきれなくなり、多くのタイトルの中から読みたい本を探すことに手間がかかるようになってきました。どうしたらより使いやすく収納できるか悩み、用途別に分類できたらということ、タイトルの再生時間で区別することにしました。全9台を①1分から20分まで、②20分から1時間まで、③1時間超の3つに区

分し、それぞれ3台ずつとしました。このように分類したことで、使用したい子どもたちにちょうどよいタイトルを探しやすくなりました。

昨年度までの取り組み

これまで本校では、

- ・マルチメディアDAISY図書は、学校の中ではどのように活用できるか
- ・マルチメディアDAISY図書周知のための活動

を行ってきています。

その中で、マルチメディアDAISY図書がどのような子どもたちに有効かを、本校なりにまとめてきました。

本校に通う子どもたちとマルチメディアDAISY図書とのかかわりについて、①本導入期の子どもたち、②障害特性や発達段階に合わせた配慮を必要とする子どもたち、③一人で本を楽しむことができる子ども、それを目指す子どものような整理を試みました（『わいわい文庫活用術④』参照）。

今年度は②を「文章を読むことは難しいが、聞いて理解できる子ども」として活用事例を紹介します。

ライブラリーオリエンテーション

本校では、毎年ライブラリーオリエンテーションを複数回行い、貸出方法の説明やさまざまな読書媒体の紹介を行っています。その際には必ずマルチメディアDAISY図書を、子どもたちや教職員が体験できるようにしています。新生入生や新職員にとって有効であると同時に、存在を知っている人にとっても思い出して使用する機会となっています。



3. マルチメディアDAISY図書の活用事例

① 本導入期の子どもたち

まだ本に触れる経験が浅い子どもたちは、身近な人に絵本を読んでもらうことで、その人の声に反応して本の方を見ようとしたり、自分でも手に取ってページをめくったり、一緒に声を出そうとしたり、と少しずつ本に興味をもっていきます。まだ身近な人などの働きかけが必要で、一人で本を楽しむには積み重ねが必要な段階です。

このような子どもに折に触れ本を提供することは重要ですが、マルチメディアDAISY図書だから担える役割もあります。ある程度近くにはいるけれども、本を読むことはできないという時間での活用です。AさんとBさんは、食後のセラピーマットでのひとときに、時折iPodで読書をしています。

Aさんは『パパンがパン』が聞こえると、いつものようにゆっくりとマットの上を移動しているようでありなが

ら、iPodの近くを歩き来し、時に顔を近づけてよく聞いています。



Bさんは、マットの上で手足を動かしたり、大きく身体を揺らしながら移動したりしています。身体の動きが大きいので周囲にいろいろなものを置い

ておくことは難しいのですが、ラバー製のカバーをしているiPodなら大丈夫です。画面を下にして置くと平たいラバーの塊のようになり、手足が軽く当たっても問題ありません。

そこに『コッケ モーモー!』等を提示すると、身体を動かすのをやめて聞き入ります。その後、小さい動きで移動しながらも笑顔になるなど、聞き続けている様子がみられています。



これらは、複数名による紙芝居風の録音や、繰り返しのあるフレーズを含む短いタイトルであれば可能になっている活動です。

②文章を読むことは難しいが、聞いて理解できる子ども

一部文字が読めるなど文字の世界に入りつつある子ども、文章を読むことは難しいが、聞いて理解できる子どもにとって、傍らで本を読んでくれるマルチメディアDAISY図書は非常に効果的です。

小学部5年のCさんは、以前は『ケーキ・ケーキ・ケーキ』を好んでよく聞いていましたが、現在では『ピン・ポン・バス』のような少し長いお話を聞けるようになっていきます。

写真は授業の中で聞いているところです。自分1人で本を読むことができなくても、読んでもらったりマルチメディアDAISY図書で読書をしたりすることで、少しずつ興味・関心が広がっているといえます。



③一人で本を楽しむことができる子ども

中学部1年Eさんは会話ができ、目の前に本を開いてもらえれば一人で読むことができます。しかし、すべての活動で介助が必要で、自分で本のページをめくることもできないので、誰かにページめくりを依頼する必要があります。iPodでは、スタートさえしてもらえればページをめくらずに読み続けることができます。EさんはマルチメディアDAISY図書について、以下のように話しています。

「読んでいるところの文字が黄色くなってくれるから、自分で読んでみたい。」

それと、デージーはいつでもお話を聞けるところがいい。特にスクールバスでは、みんなが寝ていたりして、静かな空間でつまらないことがある。でも、デージー図書はイヤフォンを使って聞くことができるから、周りに迷惑をかけないで聞けて退屈することがなくなった。」

EさんはiPodを長期で借りることが多く、学校では車椅子を降りて身体をほぐすときに、家庭では、家族にスタートしてもらって自分の時間を楽しんでいるということです。要望としては、「もっといろんな内容の本が聞きたいな。ディズニーのお話があるといいかも。それに、抑揚をつけて読んでくれると、もっと本の世界に溶け込めていいなあ。」とのことでした。



中学部1年Fさんは、普段は通常の本を読んでいます。身体動きを制限される長めの入院をすることになり、病院にiPodを持っていきました。一緒に学習しているEさんがiPodで読書しているのを見て、自分も使いたいと思ったとのこと。下の写真は、ライブラリーに設置してあるタブレット端末で本を読んでいるところです。図鑑の昆虫を拡大できるのが気に入っています。



まとめ

ここまで、本校におけるマルチメディアDAISY図書の活用について記してきました。そこからは、

- *子ども一人ひとりにあった読書形態は、その実態からさまざまである
- *子ども一人ひとりの実態に合った読書形態を検討し、提供していく必要がある

ということが言えると考えています。マルチメディアDAISY図書が有効だと考えられる子どもたちには、選択肢の一つとして提供できるよう整えておく必要がある、ということです。

「子ども一人ひとりの実態に合った読書形態を検討し、提供していく」ことに向けて、引き続き取り組んでいきたいと考えています。

